

ごんぞ

2012年9月



鍬ノ峰頂上から見る山々

大町勤労者山の会

・・・目 次・・・

「滑落」死神に見放されて生還	桑原 巖	1～2
白馬岳主稜	勝野秀次郎	3
近況報告がてら	石井ひろ子	4
山行記録：戸谷峰	森田義彦	5～6
山行記録：鋏ノ峰	森田義彦	7～9
大町労山に加入して	鈴木 均	10
白馬だより	鈴木 均	11～12
私の夏山	鈴木 均	13
思い出いっぱいの大町労山	井川恵右	14
大町労山に入って	横山竜三	15
夏・合宿	谷口伸二	16～21
天狗原山事故報告	事務局	22～25



鋏ノ峰一般山行

「滑落」 死神に見放されて生還 桑原 巖

天山山脈、ポペータ峰「7439m」の記憶

今から約20年前、1990年から3年連続で、旧ソ連領天山山脈の最高峰ポペータ「7439m」へ挑戦し、3度とも敗退した。

これは3度目の挑戦の記憶である。

3度目は同行する予定の盛岡の上野氏が谷川岳で事故に会い、単独行となった。

前2度の経験もあり、天山山脈ベースキャンプには何人かの知人もいたので、単独ながらあまり緊張感はなかった。

前2回は新潟からハバロスク経由でカザフ共和国のアルマ・アタへ入ったが、今回は成田からモスクワ経由である。アルマ・アタから登山基地カルカラまでは車で入り、其処から天山国際キャンプまではヘリコプターで入る。



天山山脈ポペータ峰

今度のポペータ登山のガイドはディミトリー、通称「ディマ」である。彼とは前回のポペータで顔なじみで、日本語の勉強に熱心で日常の会話に不自由はなかった。

1992年8月初め、ディマと二人でポペータに向かってベースキャンプを出発した。

ベースから5日目、ポペータ西峰、パーシャブシャベラ「6918m」を越えてC5に到達した。

今度のポペータ登山のガイドはディミトリー、通称「ディマ」である。彼とは前回のポペータで顔なじみで、日本語の勉強に熱心で日常の会話に不自由はなかった。

1992年8月初め、ディマと二人でポペータに向かってベースキャンプを出発した。

ベースから5日目、ポペータ西峰、パーシャブシャベラ「6918m」を越えてC5に到達した。ここまでは前2回に既に経験済みである。ここまでのテントの食事には不自由は無かった。この日の夕食ではディマに勧められて60度のウオッカを飲み、酔いに任せて心地よく眠れた。

翌日は快晴で、風も無く絶好のアタック日和であった。ここからポペータへのアタックが始まる。この先はオベリスクと呼ぶ岩塔のある、ポペータ峰基部まで高度7000mで約3キロにも及ぶ長大かつ膨大な雪の尾根が続くのである。ここは夏にもかかわらず、ヒマラヤ並みの気象状況で吹雪かれると方向を見失ってしまう場所である。

C5を出発して約2時間ほど歩きルートが中国側のトラバースにかかる辺りで、ディマにトップを歩けと言われてトップに立って歩き始めた。先行パーティーのトレースをたどる楽なコースなので、さしたる緊張感も無く歩いていた。トレースが中国側へ向かって延びる氷河の上部にかかりそこに足を踏み入れた時に事故はおきた。

そこは薄く雪を被った青氷の上だったのだ。その上に足を踏み出し瞬間、使い古したアイゼンの刃が硬い氷に跳ね返されて「つるん」と滑り、そのまま中国側へ向かって滑り出した。その先は長大な氷河である。瞬間「これが最後かな」と言う思いが頭をよぎり、なぜか20歳で死んだ娘の顔が目の前に浮かんだ。

それは一瞬のことで、あっと言う間に左側の雪壁に体が投げだれていた。氷河の表面に何か突起物がありそれにぶつかって投げ出されたらしい。とにもかくにも命拾いをしたようだ。

その後はディマに助けられてオベリスクのテント場にたどり着き、先行チームのテントに入れて貰った。その夜はテントのメンバーの「ナターシャ」と呼ばれる女性に手厚い看護を受けると言う、幸運の一夜であった。因みにこのチームは登頂を果たしたとのことである。

翌日は体も回復し、無風快晴のアタック日和であったが、登頂は断念して下山に向かった。C1にたどり着いたのは夜中の12時近くで、最後は暗闇の中の懸垂下降の連続で身も心も疲れ果てていた。4日掛けて登ったところを1日で下ったことになる。

これまで、谷川岳一之倉沢の滑落、足拍子沢の雪崩、戸隠の雪庇踏み抜き、と3度の事故を生き抜いてきたけれども、今度ばかりは最後かなと覚悟決めた瞬間であったが、またしても死神に見放されたようである。

ポベータ山(ポベータさん、**ロシア語**: Пик Победы *Pik Pobedy*)は、**中国とキルギス**の国境に位置する山。標高は7,439mであり、**天山山脈の最高峰**である。また、キルギスの最高峰でもある。天山山脈の支脈カクシャール(Kokshaal-Too)にあり、**イシククル湖**の南東に位置する。

勝野秀次郎さんの スイスアルプス遠征のアルバム



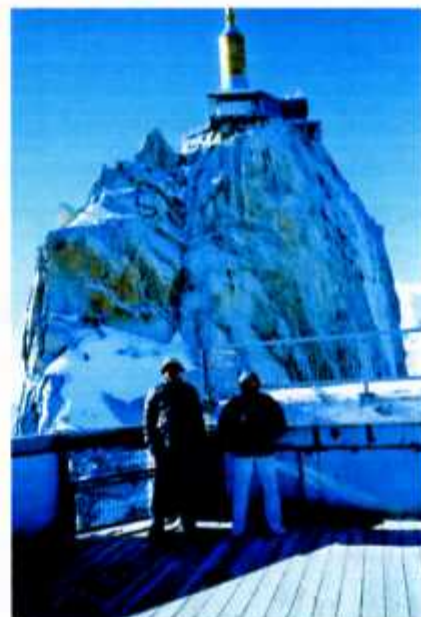
グリンデルワルトのキャンプ場



ヨッホ駅構内



ユングフラウ ヨッホ駅 後ろの山はメンヒ



エギユートミデイのロープウェイ山頂

白馬岳主稜

勝野秀次郎

4/21~22(土、日)メンバー勝野、鈴木、(斉藤)



穂高7時出発、白馬へ。連休前で二股ゲートで車止め、

約1時間準備し8:40スタート。雪のない林道を猿倉

山荘へ約2時間、休憩後テント場の馬尻へ、雪がくさっていてとても歩きにくい。13時頃テント場着設営。思ったより天気くずれず晴れ。曇りの天気でサングラスが必要だ。明日は崩れて雨の予報なので早朝(4時)出発なので早目に休む、22日、2時起床、朝食、出発の準備、なかなか明るくならないなだれ回避のため、明るくなるのを待って4:40分出発。雪はくさって歩きにくい。白馬沢側で二度ほど2m幅ほどの雪崩発生。ようやく八峰に着く、ここからスノーリッジが始まる。ところどころにシュルンドが口を開けていて左右迂回しながら急登とコルをこえて山頂をめざす。白馬沢側に雪庇が張り出している所以要注意。三峰辺りから強風に悩まされる。時々ブリザードもくる。稜線上の雪庇は間近で見ると圧巻だ。右にトラバースして抜け出て、11時山頂着。いつものことだが抜け出たときの達成感がなんともいえない。なんとか雨に逢わず白馬山荘までこれた。ここから小雨の中をテントへ大雪渓を下る。ひざ下のラッセルで苦勞する。ずぶぬれになりながら13時半すぎにテント場着。そのままテントへ。お湯をわかして休憩。それから雨の中をテント撤収。15時発猿倉へ。16時二股へ。雪のない林道を思いザックと重い足をひきずる。17時半やっとゲート駐車場へ。八方温泉に入って帰路につく。



近況報告がてら

石井ひろ子

朝な夕な毎日北アルプスの素晴らしい景色を眺めながら暮らしている私達毎日眺めていてもあきることがない。遠くに出かけ戻って来た時有明山が見えてきた時なんかなぜだかホッとする。安曇平は特にこの時期田に水が入って苗が植った時はすばらしくおーっと声を出してしまう。身近に行ける場所光城山を今なら午後出かけて歩いても気持ちいい。仕事終えて13:30頃歩いてくることもあるのでどなたか追いかけてきてください。



いざ原稿をとというとな何を書いているのかわからなくなってしまいます。筆不精の自分近況報告がてら書いています。最近の気象の変化、地球全体がおかしくなっているのでしょうか。カレンダーも気づけばもう半分のところまでできてしまったしあれもしたいわこれもしたいと手をつけても皆中途半ば。天気が良いと外へ飛び出してしまい家の中の方付けはいつするのとといかけてみるものの、行きたい所はいっぱいだし体力の低下がふと頭がよぎってくるんだけど、いつも自然の中へ飛び込んで行きたいと強く思っているのも水と金など平日あいている方どうか誘ってください！



光城山の桜の帯

山行記録；戸谷峰

記録；森田義彦

日程；2012年5月8日(火) [日帰り]

メンバー；大町労山, 2名 鶴川 森田

天候 晴れ(霞?)

コースタイム；

8:35 野間沢登山口 8:45 - 9:50 第1鉄塔 9:55 - 10:10 第2鉄塔
- 10:20 第3鉄塔(エンゴサク撮影等) 10:25 - 10:45 山頂・昼食休憩
12:00 - 13:05 野間沢登山口・13:15 解散

駐車は野間沢橋を渡った先に3~4台分のスペースあり。

※帯所のスペースは道路工事の関係車両で満杯。

コース状況・その他周辺情報；

2つ目の鉄塔から先の道が整備された跡があり、全体としてしっかりしていて問題はない。

記録・感想

大町労山・前月の月例山行をドタキャンした際に誘いを受けていたので何としてもと日程を調整して参加する。多数が参加するものと思っていたが2人だけの山行となる。半日の行程で13時に下山して畑に行くことができたのは想定外でラッキーだった。

戸谷峰は昨年1月以来で通算10回目(多分)。同峰には三才山からのコースを除いて3つのアプローチがあり、初回は保福寺から登ったが、登山口までの道が猛烈な草だったので事前に草刈りをして臨んだことがある。保福寺からのコースははっきりしてはいるが道が狭く、斜面でズルズル滑る所がある。かなり高い所で萌芽更新されたと思われる樹木が見られ興味深かった。

稲倉峠から松本市と旧四賀村の境界線を歩くコースは、旧四賀村一周境界線ハイキングを企画した際に開拓した(踏み跡はあった)コースで何ヶ所か迷いやすい所があり、また登りの連続で5時間くらいかかるが、藪山歩きの面白さを堪能できる。

今回の野間沢からのコースは最短で道もよく登りやすい。

鉄製の階段を登って登山道に入り、右手に枯れ沢を見ながらやや急な道を100mほど登った時、岩の上にいるシマリスを発見。写真を撮っているともう1尾が岩の上を走るのが目に入り、さらに道の左手に3尾目を見る。普通に見かける黒っぽいニホンリス(ホンドリ)が木の幹をまっすぐ駆け上って高い所に行ってしまうのに対して、シマリスは岩や倒木の上を自在に軽快に走り廻るが、高い所には行かないようだ。

日本に住むシマリスには北海道に分布するエゾシマリスと本州から北海道にかけて大陸から移動してきたと思われるチョウセンシマリスがあり、またペットとして飼われていたチョウセンシマリスが野生化したものも多いと考えられている。その他、鎌倉市周辺ではタイワンリスが野生化して問題になっているようだ。

足元にはヒトリシズカやイチリンソウ、エイザンスミレ、ハシリドコロ等の花を見るが、全体として林床の草の生育は遅く花も少ない。

30分あまり登った所に立派なカツラの木がある。以前、上の方から降りてくる時に色のない林の中で樹上に一ヶ所、そこだけ赤く染まっているかたまりを見て不思議に思い、調べて見てその色の正体がカツラの木の花~正確に言えば葯(雄蕊)~だと知った。その再現を期待したがすでに花は終わって丸い葉が展開していた。

9:50,最初の鉄塔に到着して小休止。10:10に2つ目の鉄塔を通過してから先行し、10:20に3つ目の鉄塔に着いてエンゴサクの花の写真を撮る。



エンゴサクの仲間にはエゾエンゴサク、キンキエンゴサク、ミチノクエンゴサク、ヤマエンゴサク、ジロボウエンゴサク等の地方種があって特定しにくい、消去法ではヤマエンゴサクが残り、色も最も近い。路辺によく見られるムラサキケマンもケシ科の同類。

3つ目の鉄塔からは稜線歩きとなり、ニリンソウの大群落が見られるのだがまだその時期ではなく、足元に見られるのはセリ科と思われる白い小さな花、アブラナ科と思われる十字架弁の白い小花、ヘビイチゴと思われる黄色い花等々で寂しい限りだ。

山頂下で面白いフィールドサイン～食痕を見た。それは、幹に対して横向きに歯でこそぎ取った跡(歯型)がついているもので、幹の一部でなく、樹皮がぐるりと全部齧り取られていた。こう言う食べ方をするのは手を使うことができる動物、即ちサルと言うことになるのだが・・・、熊柵やクマの爪痕、イノシシのヌタ場、鹿の糞等を見かけることはよくあるが、サルに出会ったり気配を感じたことは一度もなかったのでもっと意外な気がした。

もちろん、サルがいてもちっとも不思議ではない。

10:40 過ぎに保福寺からのコースを合わせて直上し、5分弱で山頂に着く。晴れてはいるが花曇りと言うか、霞がかかったような眠い景色でアルプス方面の展望もハッキリしないので『あゝだ、こうだ』と景観を楽しむ気にもならず、早目の昼食を摂る。

ジュルジュルと言う鳴き声、ブルツと言う羽音と共に不意にシジュウカラが現れる。例のようにせわしく動きまわらず、同じ場所にしばらくいてついといなくなったと思うとすぐにまた現れると言う行動を繰り返す。カラ類のこう言う動きはあまり見たことがない。他にはウグイスの谷渡り、アオグラの鳴き声とドラミングを聞くくらいで、繁殖期に入っている筈なのに野鳥も少ない。

期待のヒメギフチョウは花が少ないせいか1頭が2～3回旋回して消えただけだった。この蝶は少しもジツとしてくれないので撮るのが難しい。

食べながら喋り、喋りながら食べて 12:00 発、道中も歩きながら喋り、喋りながら歩いて 13:05 下山。同行の女史とは勿論初めての山行だが、花の話題、山の話、旅の話、食の話、職の話等々話しが弾み、楽しく歩かせてもらった。中でも食の話、旅の話が一番盛り上がる。

わずか半日だったが、久々の山行で心身爽快。よい機会を頂き、感謝！



ニリンソウ

自己紹介 森田義彦

1944年、広島県生まれ。約10年間の冒険学校の活動と並行して単位山岳会(佐伯FHC)を組織し、労山県連に加入して自然保護部長を務める等、県連の再建に携わった。

2001年、松本市に転入し、『あまてら少年団・冒険学校』&『境界線』(山の会・2004年～2008年まで)をつかって子ども達の冒険学校と自らの登山活動を継続し現在に至る。大町市ぐるったネットワークに所属し、黒部湖畔トレッキングや黒沢尾根のスノーシュー・かんじきハイク等のガイドを務める。また千年の森のスタッフとして子ども対象の野外活動に取り組んでいる。

山行記録； 歙ノ峰

記録； 森田義彦

恒例の歙ノ峰登山に今年は21名もの申し込みがあり、会員と合せて33名が国営アルプスあづみの公園奥の白沢登山口から山頂を目指した。自身としては初の月例山行で、これまで何人かの方といくつかの山行に同行させてもらったが、今回初めて大勢の会員の方々と一緒に登ることができ、やっとお仲間に加えてもらった感じがして嬉しい限り。

7:30にコングランドキャンプ場に集結。車に分乗して白沢登山口に移動し、7:58勝野さんの先導で出発する。33名の大集団は長蛇の列を成し、1歩また1歩と冬山のラッセルのペースに等しい歩みでゆっくり登る。ヒマラヤ経験のある人はこれをヒマラヤンペースだと言う。そうなんだ・・・と感心するがかなり遅いペース。参加者の経験や力量が分からない時点ではゆっくり行くしかないのだろう。

送電線巡視路の階段を登って緩やかな小尾根を30分でNo.18鉄塔に着き10分の小休止。鉄塔から20分で右側が崩落したやせ尾根を通過。その先の尾根を『く』の字に曲がって右にトラバースし主稜線に出ると、そこからは右手眼下に安曇野の景色が広がる。

すべての田圃に水が張られた安曇野は水浸し状態で、家々や屋敷林が湖に浮かんでいるように見える。高瀬川流域の扇状地には300mもの厚さの砂～砂礫層が堆積していると聞いたことがある。川の下には川があり川床から岩盤までの砂や砂礫の層には水が詰まっている筈である。そうでなくては川に水は流れない。田植えの時期だけに見られるこの景観は、その水があたかも地表に染みだしてきたかに見えて印象深かった。

9:31、見晴らしのいい尾根上で休んで景観を楽しむ。南方に谷を隔てて三角錐の山がある。その稜線が東に延びてゆっくり高度を下けているのが見え、その南方にその山と東側の稜線がよく似た山が重なって見えている。

よく似たこの2つの山は安曇野市の方から見ると、歙ノ峰とその東側(仏崎)の稜線とも非常によく似ている。つまり安曇野から見るとまるで相似形のようによく似た稜線を持つ山が3つ重なって見え、歙ノ峰が雲に隠れている時には、その下に重なる山を歙ノ峰と見紛うほどなのだ。

その遠景の三角錐の山は城山(870m)と言う山で、その西に見えているやや高い山が雨引山(1371m)だと教えられたが、地図で見ると三角錐の山は大洞山(1093m)で、城山はそのすぐ下のこんもりと盛り上がった方ではないかと思える。(如何に・・・?)

この後、小林会長から横田さん共々、先頭に来るように言われ、何事かと思いつながら前に出るとその辺りから木や岩にロープが張られた道になり、さらに進むと右下が崖になった足場の悪い場所に至る。そこがコース中最大の難所で、横田、小林、森田の3名がここに陣取って参加者をサポートするとのことだった。

サポートと言っても谷側には倒れた木があるだけで掴まるものが何もなく、揺れる倒木の上でバランスを取ってふらふらしているだけなのだが、そういう風の下に誰かがいると緊張感が生まれるものなのかもしれない。

その難所を超えて10m弱の坂を下り切ると、そこからがオキユウトな登りの連続となるのだが、ヒマラヤンペースと言うものは牛の歩みの如くただただと少しづつ進むだけなのでその登りのきつさをちっとも感じさせず、下山の際にそのあまりの斜度に驚き、登山と言うものはゆっくり登ればこんなにも楽なものなのかと思った次第。

鉄塔を過ぎた辺りから左手後方に餓鬼岳の頭が見え始め、登るにつれて唐沢岳が競り上がってくる一方、行く手に北屑岳と七倉岳の稜線が見え、北屑の西に針の木岳が見え隠れしていた。やがて裏銀の稜線上に烏帽子岳が見え、さらに続く山を三ツ岳と教えられる。

七倉岳の稜線の左奥(西)に見える2段になった大きな山を不動岳だと言う人と南沢岳だと言う人がありはつきりしない。前々からそれが気になっていたのので帰って地図と写真を突き合せて調べて見た。

船窪～不動間の稜線は2459mの第2ピーク、2299mのピークへと西進した後にほぼ真南に折れている。船窪第1、第2ピークは七倉岳より低いので七倉岳の後ろに隠れて見えないが、そこから南進した先に不動岳があるのでそれが七倉岳の左手に見えているのではないかと思われる。

2段になった山の低い方が地図にある2293mのピークで、写真を拡大してみると上下2段のピークの東側の斜面がすり鉢状になっているのが分かる。これは不動岳の東面と不動～船窪ラインの南～南南東面が不動沢の源頭で、不動沢に向けて荒々しく激しくガレ落ちていることと一致する。

裏銀の主稜線は不動岳からほぼ直角に西に折れるので、その奥に重なるように続いて見えているのが南沢岳なのではないか・・・、烏帽子岳との位置関係からもそう思える(如何?)。近いうちに確かめに行ってみよう。

難所の鞍部から急登を40分、ミネザクラを見たりロープのある岩場を攀じ登ったりして右上に見えるピークを目指しているうちにクマザサの茂るやや緩やかな斜面となってほどなく鎌ノ峰山頂に着く

10:28 全員登頂。登山者は他にも多数あって狭い山頂は大勢の人でごった返していた。鶴川さんが遠望の山名を解説する一方、食担氏等が中央付近のスペースにコンロを3つ並べて豚汁をつくり始める。予め下ごしらえされた具材を煮て豚肉を放り込み、味噌で味付け・・・、手慣れた作業に手を出す要もないが、大量の汁が煮えるのには時間がかかり、待つ間にそれぞれが弁当を開き、談笑しながらの昼食となる。

熱々の豚汁が一通り全員にまわり、残さないようにと誰かが最後の1滴を胃袋に流し込んで昼食が終わる。その間にも次々と登山者が登ってきて狭い山頂は立錐の余地もないほどになり、集合写真もそこそこに下山開始となる(12:10頃)。

期待のシャクナゲは、完全に開いていたのはNo.18 鉄塔のすぐ上の一輪だけだった。シャクナゲにも当たり年と裏年があるらしく、花芽があまり見られないところから今年は花が少ない年に当たると思われる。加えて例年より開花が遅れており、ちらほらと赤い蕾が散見される程度だったが、もう1週間～10日ほどで一気に咲くかもしれない。

山頂付近で見られるオオカメノキは花も葉も小さく、黄緑色の葉が異種かと思わせたが、会長によるとそれは間違いなくオオカメノキで、事実、下に行くとき鮮やかな緑の大葉で花も大きかった。

登りの時と同様、難所に先廻りしてサポートに当たった後は最後尾をゆっくり下り、No.18 鉄塔で小休止して14:28 下山。クーリングダウン、参加者紹介と続き、終わりの挨拶で後日の会山行の案内などして14:50 頃散会となる。

この日の大町は無風快晴の絶好の登山日和だったが、市街地でも霜を見るほどの冷え込みで、5:00 時点で撮った爺ヶ岳の写真には新たな降雪があったのか『種まきじいさん』が写っていなかった。

ところが登頂後、正面にドカンと居座る爺ヶ岳を見て驚いた。ナント朝は消えていたはずの種まき爺さんがうっすらと現れていたのだ! 『少しくらい寒くても早く帰って種を播け』と言われているみたいな気がして焦った。で、下山後すぐに徳高の畑に直行し、暗くなるまで草刈りして次の播種に備えた次第。種まき爺さんは昔も今も健在なり・・・、だ!

終わりに・・・。 多数の参加者全員が1列で歩くと言うのはあまり感心できない。全体をいくつかのパーティーに分けてそれぞれにリーダーを置き、パーティー間の間隔を取りながらそれぞれのパーティーが独自のペースで登る等の工夫が欲しいところだ。

会員が後ろの方でひとかたまりになって話しながら登り、一般参加者が黙々と下を向いて歩いていると言うのもあまり感心できない図で、意識的に中に入って話しかける等の配慮が要るのではないだろうか。

今回の会員と一般参加者の比率はほぼ1:2だったので、1人が2人の知らない参加者と仲良くなって誘えば次の山行につながるかもしれない。せっかくの募集山行なのだからそんな風に生かしたいと思った。

自分は2人(美麻と松川)の方と懇意になれたので、機会を見て山行にお誘いしたいと思っている。何にしても多数の参加者を得たことは素晴らしいことで、会長、事務局長のご尽力に敬意&感謝。特にカラー刷りのピラと新聞掲載が効果的だった。自分は市民タイムスと大糸タイムスへの掲載依頼を請け負っておきながら忘れてしまい猛省！



大町労山に加入して 鈴木 均

まだ「単身赴任」(?)で、永住状態にはなっていないが、先日住民票も白馬村に移し、事実上白馬村民になってしまった。

昨年3月末、白馬に移住するにあたって、その前から白馬近隣の山岳会をネットで調べたが、労山は必ずしも多くはなく、長野近辺や松本のほかには、唯一大町があるだけだった。しかし、HPは開設されていないので、詳しいことはわからなかったが、長野や松本は白馬からは遠いので、大町労山に入会させていただいた。月2回の例会の頻度は多いが、参加者は毎回ほとんど数名だった。

山にのめり込み始めたのは40歳頃だが、その頃はGWや夏休み以外は当然長い山行はできず、土日も仕事などでなかなか山へ行く余裕もなかった。十数年前、大阪の労山に加入してからも、仕事の関係で例会さえ出席できない時もあったが、50台の後半頃から、かなり集中的に山行するようになった。大阪の会の企画や教育、HP作成にかかわり、また岩や雪など、けっこうヘビーな山行も多くなった。定年前頃から自分なりの山行スタイルといえるかどうかわからないが、山行回数も増えてきた。

白馬に移住して1年あまりが過ぎ、初めての冬を越した。朝早い日の出勤前の除雪には苦勞した。今シーズンは、なんとか人力だけでクリアしたが、いずれ除雪機が必要になるのではないかと考えている。「毎週山行」という大きな課題を自らに突きつけ、この1年間は、まあまあ山に登ったと思うが、燃やしきったという所まで行っていない。が、不完全燃焼というわけでもない。北アルプスや近隣のたいていのルートは登っているが、北信や東信、奥秩父、越後の山々は大阪から遠いということもあって、まだまだ登っていない山も多い。もちろん東北の山も多く残している。白馬にいれば、3000m級の山々と低山・里山も楽しむことができる。春は残雪と芽吹き、新緑そして全山紅葉の秋がすばらしい。白馬から2時間くらい車で走れば、けっこう登れる山もあるので、毎週まで行かなくても、できるだけ多くの山に登ってみたいと思う。それに、行ってみたいバリエーションルートもたくさんあるので、体力とレベルを考えながら、仲間のみなさんと計画的に登ってみたいとも思っている。

加入して1年にもなっていないのに、「事務局長」とやらにされてしまったが、私なりに理解して大町労山の課題は少なくないと思っている。

全国連盟が数年前から問題提起している会員の高齢化や減少、遭難(事故)の増加など、多くの会が共通して抱えている課題と大町労山固有の課題(たとえば情報のデジタル化と共有、山行スタイルなど)もあると思っている。何よりも若い会員の入会を勧める工夫と努力が求められている。

「山岳会」もしょせんは趣味の会であり、会員一人ひとりの思いや生活スタイル、山への志向など違って当然であるが、一定の共通認識も必要だ。「山岳会」とは何か。もう一度原点に立ち返り、議論し、そして山に行き、楽しく事故のない山岳会をめざしたいと思う。



この夏は、源治郎尾根から剱に登った後、帰阪して1週間ほど大阪に滞在しただけで、ほとんど白馬にいた。山に入らない日は、たいてい家の周りの仕事に集中した。

まずは、雑草取り。小さな家ではあるが、周囲（雪の関係で、隣地からは3m、道路から5m離さなければならぬ）は、梅雨が明けてから伸び放題で、去年は除草剤を撒いてそれなりの効果はあったが、今年は可能な限り根から手で抜いた。神経質なほど、小さな双葉も見つければ抜いた。それでも、すぐに伸びてくるので、きりが無いが、自分でも満足できるほどけっこう綺麗になり、広く感じられるようになった。

そして、冬に向けての薪づくり。小さな薪小屋（といっても、幅・高さ2m弱、奥行き80センチ程度）を去年初めて造ったが、意外と材料費がかさんだので、今回は家をリフォームしたときに残った木材を使って、同じような薪小屋を二つ造った。その次は、1年越しに雨ざらしにしていた丸太の輪切りを薪割り機で割る作業だ。これが今までと違って大変だった。1年間丸太の上には何も被せずに積んだままにしていたので、雨を吸い込み、想像以上に水分を含んで、乾燥していればパーンと気持ちよくなるのに、薪割り機のくさびが喰い込むだけで、なかなか割れない。その上、地面に接していた丸太は蟻の巣になって大量の卵があり、黒い蟻がぞろぞろと這い出してきた。駆除剤を撒き、どうしても割れない丸太をさらに天日に晒した。

2年前までのように、時々しか白馬に来ない場合は気がつかないことや多少面倒でも一時の我慢ですんだが、生活するとやはり改善した方がよいことが次々と出てくる。外の水道がないことも、その一つだった。山から帰って靴のメンテナンスをするにも、大きな泥を落としてから家の中の洗面所で靴底を洗ったりしていたが、これでは配水管が詰まりかねない。それに、外で手も洗えないことから、水道屋さんに依頼して栓を引いてもらったが、これも雪国ゆえに、普通には行かない。街のように管が露出しているも見栄えの問題だけだから安くできればそれでいいのだが、冬は凍結するため露出はもちろん駄目で管を30センチ埋めなければならないという。それでも、白馬は雪のおかげで地表が温かく30センチでよいが、八ヶ岳山麓などでは、降雪が無く冷えるばかりなので40センチも掘らなければならないらしい。それでも30センチ掘るためには重機が必要になり、工事費は一気に跳ね上がる。結局、水道管を埋めずに凍結防止帯を巻いて床下を通したのだが、床下には蜂の巣が成長していることが発見され、放っておくと秋には巨大になるというので、これまた強力な蜂撃退スプレーで駆除してもらった。白馬に限らず、寒冷地では、このように生活のすべてにおいて、それを前提にした居住対策をしなければならない。

その次は、以前から気になっていた松の大木を切り倒した。「みそらの」は平川という川の河川で、雑木の広葉樹より赤松が多く、開発から30年以上も経て、天に伸びる一方で、枝が屋根に覆い被さり、雪害を発生する。広葉樹はやすらぎを覚え、同じ松でも落葉松なら紅葉や新緑で季節を感じさせるが、赤松の刺々しい葉はいくらあっても、ないほうがまだ。かくて、直径約40センチにもなる巨木を一人でチェーンソーで切断して倒すことに挑んだ。何

人かに聞いていたことやインターネットで調べた方法で、ロープ（クライミング用のロープは伸びるので使えない）も買って切るべき松に掛け、支点にする松を通してウィンチで引っ張ったが、なかなか倒れない。エンジンチェーンソーといえども、堅い生木に1センチ溝を入れるのも大変だ。混合ガソリンやオイルの消耗も激しい。市販の混合ガソリンでは高価なので、初めてガソリタンクを購入し、オイルを混ぜて自分で作ろうと思ってガソリンスタンドに行ったら、できあいの混合ガソリンがあるのだった。ホームセンターで缶入りを買うより半値くらいだった。

倒す方向を見定め、計算通りに二日かかりで前と後から切り込みを入れていった。すると、突然、バキーンという音がして、巨大な松が家の方に倒れた。スローモーションのようにゆっくり倒れると思ったが、想像以上に倒れるスピードは早かった。瞬間的に逃げるのがやっとだった。ロープは、全くといっていいくらい効いていなかった。どうも、重心が家の方向に傾いていたようだ。えらいことになってしまったが、後悔してもはじまらない。20数mもある松の木は、屋根の一番上を越えて反対側にまで伸びている。隣地まで入り込んでいないのがせめてもの救いだった。さて、この後どうするか、作戦を考える。梯子で屋根に登って様子を見ると、あっちこちに太い枝が当たり、数カ所でトタンが歪んでいる。一カ所が屋根にくい込み、15センチほど穴を開けてしまっていた。チェーンソーで数メートルくらいに切って屋根から落とすとすれば、さらに屋根を痛めてしまう恐れがあるので、薪にする程度に短く切って転げ落とすしかなさそうだ。屋根の上でチェーンソーを使い、一人で何十カ所も切るには時間と日数がかかりすぎる。仕方ないので、管理事務所に電話して様子を見てもらい、業者に来てもらうことにした。さっそく翌日、クレーン付きのトラックで松を持ち上げ、反対側に倒してもらった。そして、翌々日屋根屋さんに来てもらって修理した。とんだ騒動、素人木こりの失敗談になってしまった。この後どれだけの請求が来るのか不安だ。

「一人でやるのは危ないからやめておけ」と言われ、だいたい、松の巨木を一人で倒そうとすること自体が平常ではないことはわかっていたが、時間があるときにこれもチャレンジという気持ちでアタックしたのが計算通りにいかなかった。いまは、切り倒してもらった松を薪にする長さに輪切りにしようとしている最中で、これだけでもかなりの時間がかかる。

「田舎暮らしはいいね」とよく言われるが、たとえばこのように住んでみると大変だ。ともかく生活のすべてにおいて雪を想定して対応しなければならぬ。今シーズンの冬をどう越すか、いまのところ除雪車を購入していないので、厳しさへの不安はゼロではない。



私の夏山

鈴木 均

この夏は、7/15 天狗原山、7/28～30 劔岳源治郎尾根、8/8～9 白馬鍾温泉から不帰・唐松岳、8/16 戸隠西岳 8/24～26 七倉から船窪岳・烏帽子岳で終わった。他に、新穂高から槍と水晶から湯俣温泉なども計画していたが、天候などの関係で行けなかった。

天狗原山と船窪・烏帽子は大町労山で、劔だけが泉州労山、不帰は山の旧友と、西岳のみが単独だった（下山ルート崩壊と体調不良で登頂せず）が、すべての山行が天候にも恵まれ、自分なりに印象深い夏の思い出になった。

天狗原山では、大町労山会員の友人が転倒骨折というアクシデント、源治郎尾根は1峰までの長い登り、不帰は猿倉から鍾温泉経由で稜線に出るのが長かったこと、久しぶりの不帰の快適な岩と戸隠蟻の戸渡り越え、舟窪小屋のランプに囲まれた温もり、烏帽子までの崩壊激しい長い登山道……。日帰り、テント（劔沢）・小屋泊まり、それぞれの味があったが、今回、不帰手前の天狗小屋及び船窪・烏帽子の各小屋で計3泊もしたが、久しぶりの小屋泊まりでテントに比べればそれはそれは快適だった。なによりも幕営に比べれば食事がよかった。天狗は村営なので村民割引（2割）、船窪は勝野さんのつながりでかなりのサービスをしていただいた。烏帽子でもビールをもらった。テントと違って、登山者どうしの交流もできた。テントはエコノミーだが、たまには小屋泊まりもええなあ。

積み残した戸隠西岳や新穂からの槍、水晶から湯俣など、他の山行日程の関係で、この秋には難しいが、宿題として残しておくことにしよう。他に、餓鬼岳から燕も同様だ。



左上：舟窪小屋付近からの槍と右は裏銀座方面 右上：船窪岳頂上から
左下：烏帽子岳 右下：烏帽子小屋からの焼けるようなサンセット

思い出いっぱいの大町労山

井川恵右

昨年は労山の山行に一回も行かなかった。剣岳や仙丈岳、鹿島槍の夏山合宿、針の木の清掃登山などにみんなと行ったのがついこの間のように感じる。風吹大池の神秘的な景色も素晴らしかった。

きのこ山行、スキー、一般山行で登ったふるさとの山などいずれも楽しい思い出を作ってくれた労山の仲間感謝している。こうした仲間とのぬくもりをいつまでも持っていたいと、飲めない自分だけ飲み会にだけは参加している。今は石井さんと里山の個人山行を時々楽しんでいる。

今年ががんばって会山行にも参加したいと思っている。

戦後の登山ブームは学生や労働者の力が大きかった。その中で労山は労働者の山岳会として誕生し、意気たかく活動していた。若い人が職場や地域の仲間といっしょに登山を楽しむ時代が又来るだろうか。大町労山にも若い会員が増えるようにみんなでがんばろう。



長峰山にて

「大町労山に入って」

横田 竜三

大町労山に入る前は、冬はスノーボードでゲレンデに行って、夏は会社にいた元山岳部の方が山に誘ってくれたのをきっかけに山登りを始めました。

北アルプスの登山口近くに住んでいるため、適当に近場の山を登ることが多く、気がつけばほとんどの山を登っていました。(北アルプスの中)。

山岳会に入ろうと思ったのは、七倉から湯俣にいったとき水門の近くのつり橋に「北鎌尾根」の標識を見つけまして、これがあの松濤明・加藤文太郎の無くなった北鎌かと思ったのが理由です。

山岳会に入ればロープを使ったスリルある登山が行われると思ったからです。今までの山行は縦走がすべてで登攀という山行に憧れていたのです。

北鎌ですが、夏の人が多い時期に行ったこともあり、千天出合の上流の沢に結構人がキャンプをしていて、あまり孤独感がなかったのを思い出します。

初めての80Lのザック、燕～槍～穂高へ抜ける縦走に非常に魅力を感じました。3日間で小梨平のキャンプ場に到着したときは嬉しかったです。靴下がこれほどまで臭くなるとは思っても見なかった、鼻が曲がりそうになった。

一人で北鎌縦走を経験したのもうハイキングみたいのは十分かなと思い、近くの山岳会を探しました。大町労山が一番近かったというのが入会の動機です。

山岳会に入ってから、フリークライミングにかなり興味を示しまして、垂直壁に対する憧れが強くなりました。2年間くらいはクライミングがうまくなりたいと言う気持ちが強く、頑張っていたのですが、レベルが上がらず挫折しました。

「里山からヒマラヤまで」ということで高所登山を目標にする方や、里山で十分という方、アルパインスタイルの者多種多様ですが、自分の登山スタイルを確立できなくて早6年の歳月が過ぎました。

この作文の提出を機にもう一度憧れていたアルパインスタイルの登山者を目指そうと思います。



2012. 8. 24~8. 26



夏・合宿



報告 谷口伸二

メンバー：谷口、鈴木、北條、石井ひ、小松原利、桑原、江口(一般) 計7名

コースタイム

24日 7:00 七倉登山口 →8:57 唐沢のぞき→ 9:45 岩小屋→ 10:48 鼻突八丁
→11:57 天狗の庭 天狗の庭 12:36 → 13:20 船窪小屋着

25日 5:45 船窪小屋 →6:40 船窪乗越 →7:00 船窪第1ピーク →8:36 船窪第2ピーク →
11:18 不動岳 11:40 →13:20 赤沢岳 →14:10 烏帽子岳分岐 14:25 →14:48 烏帽子岳
烏帽子岳 15:00 →15:55 烏帽子小屋着

26日 6:30 烏帽子小屋 →7:16 タヌキ岩 →7:23 三角点 →9:47 濁沢登山口 →10:15 高瀬ダム



予定より10分遅れで七倉登山口を出発する。
最近、午後になるとゲリラ的な雷雨があり少し気になるがみんな元気。

(桑原さんは船窪小屋までの予定)



唐沢のぞきまでの急登を終え一休み

(桑原さんはこの後、体力に不安を感じ下山する)

勤労者から年金者へ
労山から老山へ
若者はどこ？



ここから
今日のメイン 鼻突八丁の登りです。



木のハシゴが連続します

やっと展望の開けた天狗の庭に着きました
あと1時間 ゆっくり休憩することに



小屋近くの稜線にはまだきれいなお花が咲いていました。



カンパニー



船窪小屋では勝野さんのお陰で、到着時に缶ビールの普通缶を、夕食時にはロング缶を各自にサービスしてもらいました。さらに、宿泊費を全員1000円割り引いてもらいました。

明日向かう不動岳
これを越えて烏帽子まで
長丁場です。晴れてくれ～

2日目



昨日、江口さんの靴底が両方はがれたため、小松原さんと下山することになりました。これから先は4人で行く 今日も天気は良さそうです。が、暑くなりそ～



これが秀次郎新道か？

崩落地に新しく付け替えた道がありました。



船窪第一ピーク
崩壊地の肩にある標柱は来年まで立っているのだろうか



第二ピークまでの間は、はしご・ヤセ尾根・クサリがあり、慎重に歩く。





第二ピークから先に見える不動岳
 まだまだ遠いな～
 水は烏帽子まで足りるだろうか

黒部湖と立山も見えてきました。
 天気は最高



南沢岳の天端は平らで広い

不動から南沢岳の間もお花がきれいです



烏帽子岳に近くなり今日の行程で
 初めて人に会い、烏帽子をバック
 に記念写真を撮ってもらいまし



烏帽子山頂での記念写真



烏帽子近くの池塘と緑、花も咲いていて公園の雰囲気です。



烏帽子小屋では小林会長によろしくと缶ビールをサービスいただきました。

夕日がきれいです。
昨夜は星もきれいでした。
明日も良い天気の様です。



3日目



今日もきれいな日の出です。



昨日歩いた稜線を見ながら、どんどん高度を下げていきます

崩壊の進む不動・七倉の斜面から大量の土砂が高瀬ダムに流れ込んでいます。すごい崩壊地を見てきました。



最終日は尾形さんがブナ立尾根の途中まで迎えに来てくれました。

今回も会員の皆さんのおかげで無事に合宿を終了できました。また、経済的にも大変助かりました。

無線機・登山靴の事前点検不足等少し反省するところもありましたが。来年もしっかりトレーニングをして一人でも多くの会員で成功させましょう。谷口

